

生活科

山 岸 朋 子
江 藤 里 佳

1 めざす子どもの姿

昨年度より、生活科の本質を「豊かに感じる心を育むとともに自立への基礎を養うこと」、そして本質に基づく基礎・基本を、「自分なりの思いや願いをもちながら、「ひと」「もの」「こと」とかかわること」として、研究をすすめてきている。

これらをふまえて今年度は、次のような子どもの姿を生活科の授業においてめざしていく。

「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験を通して、自分の思いを変容させながら、自分なりにかかわりを広げたり深めたりしようとする姿

生活科では、地域の「ひと」「もの」「こと」とかかわり合いながら学習をすすめることが多い。しかし、本校の子どもは、金沢市全域から通学しているため、地域と子どもの生活との関連が希薄である。共通の地域をもたないため、下校後友達と一緒に地域に出て遊ぶことはほとんどない。集団で遊ぶ経験が少ないため、日常生活の中で諸感覚を通して「ひと」「もの」「こと」と直接かかわりあう経験も少なくなっている。

その一方、テレビやコンピュータ、本などの様々なメディアから得る情報量は、増え続けている。子どもの知識は豊富であるが、実体験や感動をともなわない知識であることが多い。そのため、人によって考え方や感じ方が異なってもよいことが分からず、自分の知識と異なる考え方や感じ方を認めることができずに、自分の考えを押し通そうとすることがある。また、経験のないものものに対して臆病になり、失敗をおそれて、友達の考え方や行動を必要以上に気にする子どもや、自分から進んで活動に参加できない子どもも多い。これは「ひと」「もの」「こと」と直接かかわり、夢中で没頭する体験が乏しいことによって、感じる心が育っていないことが一因であると考えられる。

そこで、生活科の学習では、子どもが思わず参加したくなるような活動を設定し、身近な「ひと」「もの」「こと」と、どっぴりとかかわることのできる場を設定していくことが必要となってくる。私たちは、身近な「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通すこと

を重視し、体を動かしてたっぷり活動する楽しさや、相手が喜んでくれるうれしさ、自分の願いの実現に向けて活動するすばらしさなどを味わう場を重ねることで、感じる心が豊かになっていくと考えている。感じる心が豊かになれば、自分と異なる考えも認めることができるであろうし、「ひと」「もの」「こと」とのかかわり方も分かり、自分からすすんで「ひと」「もの」「こと」とかかわろうとすることもできるようになるであろう。

また、「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験を通すことと併せて、自分とのかかわりにおいて学ぶことも重要である。「ただ生き生きしている」「ただ、楽しく活動している」だけではなく、それぞれの子どもが、活動する中で個に応じたかべにぶつかりながら乗り越える方法を自分なりに考え、自分の思いを変容させていくことが必要であると私たちは考えている。活動する中で、子どもの内に「前は〇〇だったのに、〇〇に変わっていた」「友だちに教えてもらったやり方が分かった」「〇〇を工夫した方がもっと楽しくなると分かった」などの知的な気づきが芽生える。そして、知的な気づきを通し、「このあとどのように変わっていくかを調べよう」「教えてくれた〇〇さんに分かったことやお礼の気持ちを伝えよう」「今度は〇〇を工夫してみよう」など、自分と「ひと」「もの」「こと」とのかかわりをさらに広めたり深めたりしていこうとする姿が見られてはじめて、生活科の学習が成立すると考えている。

生活科は、小学校1、2学年のみの教科である。幼稚園や保育園では、活動を楽しむことに重きがおかれることが多い。しかし、生活科では、活動を楽しむことだけではなく、活動の過程を重視する。活動の過程で偶然出てきた事柄や動きを、子どもが社会的・科学的に見つめることができるように、教師が働きかけ広めていくことが重要である。子どもが活動の過程で気づき、悩み、会得したことが他の学習や普段の生活の中で使えるようになることではじめて、知識が生きて働く知恵となる。この生きて働く知恵は、他教科や3年生以降の教科学習や総合学習にもつながっていくものであり、生涯学習を視野に入れた自立への基礎となっていくと考える。

2 めざす子どもの姿に迫るために

(1) 「ひと」「もの」「こと」と

夢中になってかかわる活動や

体験の場を設ける

生活科では、同じ学習活動を行っても子どもによって活動に対する興味・関心が少しずつ違ってくる。そこで、教師は子どもが何に関心を持ち、何に気づいているかなどについて機会あるごとに捉え、子ども一人一人の思いを見取る努力をしていくことが大切である。

また、子どもが「やってみたい」「おもしろそう」「ふしぎだな」と興味・関心をもつような学習材の選択や出会わせ方の工夫、学習環境の整備も必要である。特に1、2年生の子どもは、「ひと」や「もの」とどっぶりとかかわることを通して学ぶことが多いと私たちは考える。そこで、2年間を通して様々な「ひと」や「もの」とかかわることができる活動を、学習内容の中に積極的に取り入れて扱っていく。

1年生では、学級や学年の友達同士や上級生、身近な人々とかかわることのできる活動を多く取り入れていく。本校の1年生の半数は、隣接する附属幼稚園から進学してくる。一方で半数の子どもは、様々な地域の幼稚園、保育園から入学してくる。入学当初は、附属幼稚園出身の子どもとそうでない子どもの間に隔たりがあることは否めない。その子ども同士がかかわるあう場を多く設けることや、「もの」とどっぶりとかかわる活動の場を設けることで、楽しさを共有した仲間とのつながりも深まっていくだろう。そして、どの子どもも安心して活動に取り組むことができるようになるであろう。

2年生では、1年生や附属幼稚園の5歳児、昔遊び名人などのゲストティーチャーとかかわる活動を取り入れていきたい。小学校にも慣れ、いろいろな知識もついてきた2年生にとって、年下の子どもの世話をしたり教えたりする活動は、学習意欲を喚起するものである。例えば、サツマイモの苗を植える活動では、まず自分たちで植えてみて教えるためのコツをつかみ、その後1年生に教え、さらに反省を生かして5歳児に教えるというように対象を変えて活動を繰り返すことで、自信を持って活動に取り組むことができるようにしたい。

(2) 知的な気づきを促す場を設ける

知的な気づきは、子どもが自分なりの思いや願いをもちながら身近な「ひと」「もの」「こと」と直接かかわる活動や体験の中から生まれるものと考えられる。そこで、見る、つくる、栽培する、遊ぶといった直接かかわる楽しさを味わうことのできる活動を工夫していきたい。

活動を行う際に、教師は、子どもの姿に願いをもつことが大切である。この時間、この単元が終わったときにはこんな姿になってほしい、という願いをもちながら活動を組み立てていくことが必要である。教師の願った姿に子どもが近づくために、意図的なかべをつくりたい。そのかべを乗り越えたときに、子どもに気づき生まれるようなかべをつくることのできたらよい。そして、気づいたことを次の学習活動に生かすことができるような子どもになってほしい。しかし、そのかべは子どもの実態に合わせて乗り越えられる高さのものでなければならぬ。さもなければすぐにくじけてしまう子どものことも考慮して、教師は子どもの姿にたどり着くまでの段階を細分化して捉え、活動を展開していく。

(3) 自分なりの思いを

自分なりに表現する場を設ける

学習活動を通して感じたことや思ったことを、通り一遍の言葉や表現ではなく、自分なりの思いをこめて表現できるようになってほしい。そのために教師は、子どもが自分の思いを素直に表現できるタイミングや場所を設定したい。思いが強い間に発表の時間をとることや、書くという表現にこだわらず、活動している場所で今感じた思いを話すなどである。

また、実感の中からでてきた今伝えたいことを、友達や周りの人々により分かりやすく伝えることができるような表現方法を選択できる力もつけていきたい。そのためには、生活科だけではなく他教科においても様々な表現活動の場を設け、いろいろな形態の表現方法を知ることが大切である。教師は、日々の表現活動の中で、上手な表現だけではなく、自分らしさを出している子どもの表現を取り上げ、認め広めていきたい。そうすることで、子どもは安心して自分なりの表現ができるようになると思う。

(4) 活動をふり返し 交流し合う場を設ける

活動で楽しかったことや、どんな思いをもって活動したかなどを話し合い、次の活動にステップアップしていくことができるようなふりかえりの場を設定したい。「楽しかった」だけで終わってしまいがちなふりかえりの場であるが、自分や友達に知的な気づきがあったことに気づくことができる場、友達のよさや自分のよさに気づくことができる場にしたい。そのためには、教師が子どものよさに気づいたり自分の変容に気づいた子どもの発言や行動を認めることが大切である。それをきっかけに自分にも知的な気づきがあったことや、自分が変容したことを実感することができるであろうと考える。

3 実践例 - 1年 -

(1) 単元名 あそぼう あそぼう

- (2) 目標
- ・身の回りの自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして遊びを工夫し、思いっきり楽しむことができる。
 - ・友達と一緒に遊ぶために遊び方を工夫したり、約束やルールを作ったりして、友達とよりよいかかわりをもつことができるようになる。

(3) 指導にあたって

本単元におけるめざす子どもの姿について

本単元の基礎・基本は、身の回りの自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして遊ぶ活動を通して、友達ともっと楽しく遊びたいという願いをもち、「ひと」「もの」「こと」とかかわることである。

入学して2か月。子どもは休み時間になるとそれぞれに遊び始める。「おわります。」の挨拶とともに外に飛び出していく子、「いっしょにあそぼう。」と友達を誘って遊びに行く子、教室でお絵描きをする子…。遊び方はそれぞれである。遊びに夢中になって時間を忘れてしまう子がいる中で、教師に手伝いはないか尋ね、休み時間をもてあましている子の姿もみられる。

本単元は、子どもが友達とさまざまな遊びを体験する場を設定し、その遊びの中で思いっきり楽しく遊ぶための遊び方を工夫したりルールを作ったりしていく単元である。本来子どもは遊びの名人のはずである。身の回りにある物を何かに見立てて遊んだり、大人からみたら他愛もないことでも長い時間繰り返し楽しんだりすることができる子もいる。生き生きと遊びに浸っている子どもの様子からは自らすすんで自然や物にかかわっている姿や、より楽しく遊ぼうと知恵を出し合う姿などを見ることができると考え、本単元を設定した。

生活科におけるめざす子どもの姿「「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験を通して、自分の思いを変容させながら自分なりにかかわりを広げたり深めたりしようとする姿」を本単元に照らしてみると、「身の回りのものや自然と夢中になって遊ぶことを通して、もっと楽しく遊ぶための工夫をすることができる姿」ということができる。子どもが好んでする遊びには、自然や物と一体になって遊ぶ楽しさ、体全体で夢中になって遊びに浸る心地よさ、工夫して遊びをつくり出す楽しさなどがある。このような遊びはそれ自体楽しいことであるが、そこに友達とのかかわりがあるとさらに楽しいものになる。子どもは遊びを通して友達と自分との違いに気づいたり、相手のよさや自分のよさを尊重できる態度を身につけたり、友達との人間関係を広げたり深めたりしていくことができるであろう。

入学して間もないこの時期にこのような力をつけていくことで、これから始まる学校生活が子どもにとって楽しく豊かなものになることを願っている。

めざす子どもの姿に迫るために

①「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験の場を設ける

子どもが興味をもって取り組むことのできるような遊びをたくさん活動に取り入れる。草花遊びや砂遊び、シャボン玉遊びや水遊びなど、子どもの好きな遊びを取り上げた。夢中になって友達と活動するために、活動が広がっていくような場の設定、服装、時間の保障などを心がける。

②知的な気づきを促す場を設ける

「ひと」「もの」「こと」と直接かかわる活動や、体験的な活動を多く取り入れる。具体的には、草花遊びの得意な友達や上級生に遊び方を教えてもらいながら、からのえんどうで笛を作る活動を、泥んこ水浸しになって砂や水を体全体で感じながら思いっきり遊ぶ活動を設定する。その時に、もっと楽しく遊ぶために工夫できる時間と、そのアイデアを生かしてステップアップした遊びができる時間を保障する。

③自分なりの思いを自分なりに表現できる場を設ける

初めに提示する遊びは教師側からであっても、必ず自分の思いをもってつくったり遊んだりする場を設けたい。その中で、自分が楽しかったことやできて嬉しかったことなどを自分なりに表現することができた子を紹介し、安心して表現することができるようにしたい。

④活動をふり返り、交流し合う場を設ける

活動の終わりには、遊びの内容や友達と遊んで楽しかった思いをふり返る場を設ける。その時

に、今感じた新鮮な思いを素直に話すことができる場の設定や発問を工夫する。また、前の時間に遊んだ時と比較することができるように教師が見取ったことを生かし、子どもに返していくことで、友達によさや自分の成長を感じることができるようによい。

単元計画（総時数 10 時間＋課外）

主な活動と内容	めざす子どもの姿に迫るために	評価ポイント
1 おさんぽにいこう 〈なにをみつけたかな〉 ・タンポポがわたげになってとんでいったよ ・パンジーがきれいだったよ ・ちょうちよがとんでいたよ ・やさいさんがあつそうだったよ	①③	季節の変化を感じ 初夏の様子を感じ取りみつけたことを表現することができる
2 くさばなとあそぼう 〈どんなあそびができるかな〉 ・からすのえんどうでふえができるよ ・しろつめくさでかんむりがつくれるよ ・おおぼこですもうができるよ ・もっとしりたいなあおしえてほしいな	①②	いろいろな草花遊びに挑戦して楽しむことができる
3 すなとあそぼう 〈なにをしてあそぼうか〉 ・おだんごをつくりたいな ・おやまをつくってトンネルをほるよ ・みずをいれておふろにしたい ・みんなでしたらおおきいのができそうだね	②③④	砂遊びを楽しんで もっと楽しむ方法を工夫したり考えたりすることができる
4 しゃぼんだまとあそぼう 〈どんなしゃぼんだまをつくりたい？〉 ・おおきなしゃぼんだまがいいな ・いっぱいづけてでるのがみたいな ・ずっとわれないしゃぼんだまがいいな	①③	シャボン玉をつくるために 使うことのできそうなものを考えて遊ぶことができる
5 みずとあそぼう 〈なにをつかってあそぼうか〉 ・みずやりのペットボトルでシャワーをしたい ・シャンプーのいれものでみずでっぼうがしたいな ・おふねをつくってうかべたいよ	②③④	水遊びをさらに楽しくするために自分オリジナルの遊び道具を作りそれを使って友達と遊ぶことができる

(4) 本単元における授業の実際と考察

本単元では遊びを通して、夢中になって楽しむ喜びや、「ひと」「もの」「こと」とかかわりながら自分の変容に気づくことを大切にしようと考えた。本単元を通して子どもの姿が、生活科におけるめざす子どもの姿「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験を通して、自分の思いを変容させながら自分なりにかかわりを広げたり深めたりしようとする姿に近づくことができたかどうか、めざす子どもの姿に迫るためのポイントをもとに考察を進めていく。

① 「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験の場を設ける

子どもが興味をもって取り組むことができるような遊びをたくさん取り入れる

(ア) さんぽ

本校の1年生の教室は大変素晴らしい場所にある。教室から一步出るとそこには砂場があり、その向こうには三つ子山という緑の築山がある。その横にはおたまじゃくしのたくさんいる池があり、野菜や花が育っている広い学習園がある。この環境を生かして自然の変化の様子を子どもに気づかせたいと思い、散歩をすることにした。子どもは初めのうちは気に入った場所を眺めていただけだったが、散歩を繰り返す事で今まで行かなかった場所に生えている草花に気づいたり前に見たときより大きく成長しているおたまじゃくしや野菜に驚いたりしていた。

(イ) くさばなあそび

天気の良い日にはなるべく実際に外に出て三つ子山や畑の草花で気持ちよく活動ができるようにした。また、時間もたっぷりとって、思う存分活動ができるようにした。その結果、いろいろな遊びに挑戦したり、なかなか鳴らなかつた草笛がどうとう鳴るようになったりした。すると、休み時間にもまたしようといって友だちを誘って外に行く姿もみられ、活動の広がりがあつた。

(ウ) すなあそび

教室の目の前にある砂場は子どもにとって絶好の遊び場である。しかし、入学当初から砂場で思いっきり遊ぶ子の姿はあまり見られなかつた。昨今砂場で遊ぶ子が減っているのは、衛生上よくないという理由で家の人からさせないという話も聞いている。そこで、安心して砂遊びができるように、また思いっきり穴を掘ったり山をつくったりできるように、砂を増やしてもらい抗菌砂を入れてもらった。安全だということで保護者の理解も得ることができ、子どもたちは思いっきり砂遊びができた。

(エ) しゃぼん玉あそび

子どもはしゃぼん玉のようにきれいな物が大好きである。これまでにしゃぼん玉遊びの経験はあると思われる。しゃぼん玉のように手軽に遊べて、さらに道具の工夫や液作りの工夫で様々な楽しみ方ができる遊びを知れば、子どもの興味関心も高まるであろうと思い、しゃぼん玉遊びを取り入れることにした。この遊びを選んだことで、保護者と子どものかかわりもみられた。どんな道具を持っていこうか一緒に考えたり、うまくいかなかつたのならと、しゃぼん玉液の作り方をインターネットで検索して持たせてくれたりした。

② 知的な気づきを促す場を設ける

「ひと」「もの」「こと」と直接かかわる活動や体験的な活動を多く取り入れる
1回目の活動を生かし、ステップアップした遊びができる時間を保障する

(ア) さんぽ

常に同じペースで歩くのではなく、子どもに気づいてもらいたい場所で立ち止まってその様子について問いかけたり、直接触れてみたり、教師自身が草花遊びに挑戦したりしながら野菜や草花の成長、草花遊びなどに目が向くようにした。その結果、2年生と植えたサツマイモが大きくなったことや、野菜にも花があることなど、いままで気にしていなかつた野菜の成長に気づき、今まで遊ぶことができると思っていなかつた草花で楽しそうに遊ぶ様子が見られた。

(イ) くさばなあそび

散歩でからすのえんどうを見つけたとき、何人かの子が「幼稚園でからすのえんどう笛を作つたことあるよ。」と言って教えてくれた。すぐに鳴らすことができた子とそうでない子がいた。そのことを、たまたま放課後の水やりで一緒になつたクラスの子のお兄さんに話すと、「僕そんなの得意だから教えに行つてあげるよ。」と言つてくれた。次の朝、教室に行つてみるとほとんどの子がからすのえんどう笛をならしていた。お兄さんが同じ5年生の友達と一緒に教えに来てくれたのだ。そのことをきっかけに、今度は5年2組のみなさんと草花遊びをしようということになった。さすが5年生。様々な遊びを1年生の力にあわせて分かりやすく教えてくれたり、優しく遊んでくれたりしたのに驚いた。例えば、「草笛を鳴らすときにはなるべく幅の広い葉っぱを選ぶといいよ。」とか、「この指でここをもつとびんと張るよ。」とかである。また、「おおばこずもうで対決しよう。」と言つて、1年生がたくさん勝てるようにしてくれたり、何もいない子がいないように「何したい？」と尋ねて優しく手を取つて一緒に遊んでくれたりした。1年生はたくさん知的な気づきを得ることができたと思われる。



「こうやってふくんだよ。」「むずかしくない？」しろつめくさのプレスレットだ。かわいい！

(ウ) すなあそび

2回に分けて砂遊びの時間を設定した。

1回目は砂遊びをすることを予告し、どんな遊びをしたいか、何を持ってこようか自分で考えて持ってくることにした。学級便りで保護者にも本人が欲しいといった物だけ持たせてくれるようお願いした。子どもはそれぞれに考えてスコップやバケツなどを持ってきていた。しかし、中には何を持ってきたらよいか思いつかずに、何も用意しなかった子もいた。1回目の砂遊びで遊んでいる中で子どもはたくさんの知的な気づきを持った。砂は水を加えたら固くなることや色が黒くなること、水を流したいときは一度にたくさん入れないとすぐにしみこんでいってしまうこと、泥団子にするには固まりにくい砂であることなどである。また、たくさん水を流したかったのでスーパーの袋に水を汲んで運んでいた子たちがいた。その時にスーパーの袋の持ち手を持つと手がちぎれそうに痛いことや、みんなで持つと少し楽に運ぶことができることなどにも気づいていた。

2回目にどんな遊びがしたいか、何を持ってこようか考えたときには1回目の経験を生かして、すぐくでっかいペットボトルとか、固めるものなどがアイデアで出てきた。たくさん水を流したかったり、お菓子屋さんをするときの型抜きができる物がほしかったからだろう。2回目に持ってきた道具を見ると(表1)、1回目の時よりも2回目の方がさらに豊富で、2リットルのペットボトルや、色々な形のプリンカップ、洗濯洗剤用のスプーン、プリンの空き容器なども見られた。服装は思いっきり砂と遊ぶことができるように、体操服を着て裸足で行った。2回目の活動で子どもは、さらさらした砂の感触を感じたり、深く掘っていくとだんだん砂が冷たくなっていくことなどに気づいていた。

1回目	2回目
・すこっぷ	→・ちいさいばけつとすこっぷとおおきいぺつとぼとる
・(空欄)	→・ばけつ
・(空欄)	→・ばけつ、すこっぷ、ぺつとぼとる
・すこっぷ	→・みずをいれるもの、まえもってきたすこっぷ
・すなぼどうぐ	→・すぐくでかいぺつとぼとる
・すこっぷ	→・かためるものとぺつとぼとる
・ぎゅうにゅうぱっく でかいふくろ	→・でかいぺつとぼとる、でっかいしゃべる

表1 「なにをもってこようとおもう？」～砂遊びで持ってきた道具の変化～

(エ) しゃぼん玉あそび

この活動も2回に分けて設定した。

1回目はコップにしゃぼん玉液を入れ、ストローを2本(太・細)だけ渡した。はさみできりこみをいれて工夫したり、吹き方によってうまくできる時とできない時があることに気づいたりしながら、しゃぼん玉遊びをしていた。

2回目は自分でしゃぼん玉ができそうな道具を持ってこえることにした。みんな思い思いの物を持ってきていた。中でも多かったのがハンガーを変形させた物である。その他にも、針金を曲げてお父さんが作ってくれたという道具や、サンダル、穴の空いたおたまなど様々であった。中でも子どもの注目を集めていたのが、うちわの骨である。液をつけて走るとたくさんのしゃぼん玉がとても綺麗に舞い上がる。「つぎかして!」と言ってやらせてもらっている子もいた。ハンガーのような大きな物はなかなかうまくしゃぼん玉にならず、かごのように小さな穴がたくさんあるような物が簡単にたくさんのしゃぼん玉をつくることに気づいていた。

③ 自分なりの思いを自分なりに表現できる場を設ける

必ず自分の思いをもってつくったり遊んだりする場を設ける

(ア) さんぼ

子どもによって感じることや、気に入るものはそれぞれであるが、それを感じたときに素直に表現できる子になってほしいと考え、その場その場で話を聞くことにした。自分の好きな虫を見つけて、「こんなちっちゃいバッタを見つけたよ!」と得意気に見せてくれる子、きれいだと思いう花を摘んで「先生、これあげる。」と花束のようにして差し出す子。それぞれの子の言ったことに対して共感の姿勢をとった結果、思ったことや感じたことを素直に表現する子がふえた。

(イ) くさばなあそび

みんなで一緒に遊んで共通体験をする場と、自分の思いを大切に遊ぶ場を設けた。からすのえんどう笛、草笛、シロツメクサでかんむりやゆび作り、おおぼこずもう、草の上を転がる、花の蜜を吸うなど様々な活動の中から、からすのえんどう笛をみんなで一緒にチャレンジしてみた。(中には「きたなくてくわえることができない。」という子もいたが。)その他の遊びに関しては、自分の思いを大切に、やってみたいということに挑戦してみることにした。笛が鳴るまで1時間中こだわって挑戦し続ける子や、いろんな事をしてみたいと次々にすることを考えていく子など様々であった。何もできないでいる子は一人もいなかったのも、思いをもって活動することができたといえる。

(ウ) すなあそび

自分の思いをもって遊ぶことができるように、2回行った砂遊びの前にそれぞれどんな遊びをしたいかカードに書く時間を設けた。

1回目は何も思いつかなくてなかなか書くことができない子がいた。近くの子と相談したり、尋ねたりしながら書いている子もいた。反対に、たくさん思いつきすぎてどうしよう、書ききれないと困っている子もいた。その子は実際の活動の場面では、初めから生き生きと自分の思いを持って表現していた。また、自分で思いつくことが書けなかった子も実際に遊び始めてみると、友だちのしているのを見て自分のしたい遊びを見つけることができたようだ。友だちがしている穴掘りを手伝ったり、水くみの役割をしたりして何らかの形で参加していた。一人で黙々と作り続けている姿も見られた。友だちと一緒になくても自分の思いを表現することを大切にできなかった誰かと一緒にするような声かけはしなかった。しかし、近くで作っていた子どもが「つなげようぜ。」と言って、大きな山とトンネルでつながった川が完成した。

2回目になると全員が事前にどんな遊びをしたいか書くことができるようになっていた。その内容も場所や時間、砂の性質などをしっかり考えて、1回目より見通しをもったものになっていた。(表2)実際の活動では1回目よりも大人数になっているグループが見られた。それぞれが1回目よりもさらに強い自分の思いをもって砂遊びをしていた。また、家から持ってきた砂遊びの道具も豊富だったためか、とてもダイナミックな遊びに発展していった。

1回目	2回目
・どろだんご	→・あなほり、おやまづくり
・かわをつくる	→・やまあそび
・やま	→・ふじさんよりおおきいやま たぶんむり
・ふじさんをつくって、 とんねるをつくって、 みちをつくる	→・いけをつくって、みちをつくる
・どうぶつをつくりたい	→・おやまをつくりたい、あなをほりたい
・(空欄)	→・おかしやさん

表2 どんなあそびをしたいかな?～砂遊びでしたい遊びの変化～

(エ) しゃぼん玉あそび

自分の考えたしゃぼん玉遊びの道具をどんどん試すことができるように、しゃぼん玉液を色々な大きさの入れ物に用意した。その結果、もっと別の物でできそう、別の道具を持ってきたい、またやりたいという声が増えてきた。しゃぼん玉液を工夫して作るにより、うまくいかなかったハンガーでのシャボン玉作りを成功させたいという思いも出てきた。その場を是非つくりたかったのだが、天候の関係で1学期中に行うのは無理だった。そこで、2学期に是非もう一度しゃぼん玉遊びの機会を設けたいと考えている。

④ 活動をふり返り、交流し合う場を設ける

感じた思いを素直に話すことができるふりかえりの場を設定する

(ア) さんぽ

散歩の最後には必ず「何を見つけたかな。」「思ったこととか感じたことをお話ししよう。」というように、ふりかえりの時間を設定することで、自分一人では見つけることができなかったものに気づいたり、同じものを見ていても感じ方が人それぞれちがうことに気がつき、お互いのよさを受け入れる姿がみられた。

(イ) くさばなあそび

一緒に活動した5年生のお兄さんお姉さんに伝えたい気持ちもあるだろうと思ったので、5年生と一緒に集まり、活動した場所でふりかえりをした。5年生に伝えたいという思いが強かったからか、子どもの中からはたくさんの「楽しかった。」の言葉や「ありがとう。」の言葉がきかれた。また「〇〇ができるようになってうれしかった。」とか「何回も勝ってうれしかった。」などという声もたくさんあって、本当に楽しかった気持ちを伝えることができたように思う。また、教師から「この間鳴らせなかったのに鳴らすことができるようになったね。すごいね。」「ずっとあきらめないで練習していたね。えらいね。」などの言葉をかけることで、友だちのよさや自分の成長を実感することができたようだ。

(ウ) すなあそび

1回目は砂場が近くに見える場所でホワイトボードに向かってふりかえりをした。しかし、もっとしたかったという子どもの思いと、発問のまずさから、いろいろな子どもの声を聞くことができなかった。そこで、2回目は活動の途中でいったん中止して、砂場の周りに円になって座り、友だちの遊びの途中経過を見合い、聞き合う時間を設けた。その後、もう一度砂場に戻って残りの時間に活動をしたところ、友だちのよいところを真似してつくったり、友だちのつなげたりする姿が見られた。最後のふり返りではたくさんの子どもの友だちのよさを認める声があり、その後も休み時間になる度に友だちと砂遊びを楽しむ姿が見られるようになった。



おもいなあ。てがちぎれそう。



「きもちいいよ。せんせいもはいたら？」

(エ) しゃぼんだまあそび

活動の終わりに遊んでみてどうだったか、実際に道具を見せ合いながらふり返った。自分のはたくさんしゃぼん玉ができて楽しかったとか、貸してもらってやってみたらうまくいって嬉しかったという意見が出た。その他にも、〇〇さんののがとてもきれいですごいなあと思ったという意見や、せっかく持ってきたのに失敗したから悔しかったという意見も出てきた。うまくいかなかった子は自分だけでなく、同じような道具を持ってきた子もうまくいなくて悔しい思いをしたことを知り、少し安心したようで、今度はもっと小さい穴を持ってこようとか、絶対成功させたいからもう一回したいという次回への思いを話すことができていた。

⑤ 単元をふり返って

本単元は水遊びで最後を締めくくる予定になっているが、今年はいにくの冷夏で、水遊びをする機会がまだもてていない。9月に入りその機会を持つことができればよいと考えている。

生活科が始まって10年。ただ活動しているだけではないか、楽しければそれでいいのかという批判をうけながら、今回の学習指導要領では直接かかわる活動と知的な気付きを大切にすると指導に重点を置かれるようになった。私なりに『遊び』が『学び』になるために、どんなことが大切なのかを考えながら本単元の学習を行ってきた。そして、大切なのは身体全体を使って遊ぶことと、教師が子どもの知的な気付きに気づき、それを自覚させることだと考えた。そこで、授業の中で子どもがどのように変容していくかを的確に見取り、子どもの見方・考え方に沿った授業を組み立てていきたい(*1)と考えた。しかし、私にはその見取りが難しかった。今までは観察者として子どもの遊びを見てきたが、子どもと一緒に遊びながら見取っている幼稚園や保育所の先生方の姿勢から学ぶところがたくさんあると分かった(*2)。また、今までの生活経験をj知ることとも授業を組み立てる上で大切なことである。その子の生活経験をj知り、一緒になって遊ぶことで、子ども一人一人の成長を見取ることができ、知的な気付きを大切にすると指導ができるのではないかと考える。今後は幼稚園や保育所との連携も含め、子どもが自分の思いを変容させながらかわりを広げたり深めたりできるような学習活動を目指して努力していきたい。

参考文献 *1 小川 道子『思いっきり生活科 実践10年の足あと』日本文教出版 2003

*2 木村 吉彦『「遊び」から「学び」へ～「遊びも学習である」は本当か?～』

日本生活科・総合学習教育学会第12回全国大会自由研究発表